

仇諧古今抄

拾遺十箇條  
目之四

5
922
4





他諸右と稱卷之中

再校タヒスル十箇條序ヲ

蓮二房



蓮二かくうけぬ今子拾遺十箇條ハ  
むし祖翁の口誡をばかりて永く柳子庵の  
秘稿とあましく祖翁の滅後二十年ありて  
ひそるに白馬持寸論をありて近く我らの  
家評をとりあへ遠く天下此家議を窺ふ  
欺く者あれは疑ふ者も何れもあつた  
控り人片まきくあつたを祖翁の授託めり



古抄巻四





此巻の條目此法にふるなる一しあるれども  
貞享式と春秋と一字此條をぬくも  
中巻とあるも一箇十箇の叙文あり例と一字此條  
に二冊と目録と今の凡例を加して我子けおの  
中巻とあるも一箇十箇の叙文あり例と一字此條  
に二冊と目録と今の凡例を加して我子けおの  
中巻とあるも一箇十箇の叙文あり例と一字此條  
に二冊と目録と今の凡例を加して我子けおの

字保己 酉二月中流

照おふとよ

十箇條目録

並凡例

古法可有取捨事

▲杜鵑 ▲浮見竹 ▲柳 ▲櫻 ▲萱 ▲螢 ▲杜若

▲芭蕉 ▲蝸牛 ▲鶴鴒 此十段ハ象物ノ数量十ナリ

異名ニ呼テハ之凡四段免タレト今ノ條ニハ  
定タリ古今ノ取捨トハ世謂ナリ右ハ十段ノ各目ヲ奉テ  
一万物ノ象ノ凡例ト成セリナリ但シ柳櫻萱螢ノ四段ハ  
花鳥ノ段ニ叙文アリ異名異躰ノ差別ハ首巻ノ凡例ニナリ

去嫌可有野敵事



△父母△男女 世四只ハ人倫ノ凡例ナリ △主△誰△身 世四只ハ二句ツク去キナリ

△独△媒 世五只ハ人倫ノ嚮ナリ人倫ト △僧△寺 世二只ハ古式

二人倫ニ非ス居ホニ非スト △親王皇女△天皇皇女 世五只ハ古式ニ色々云在今式ニ指合ヲ釋ナリ

△帝御所△仙洞新院△鬼仰 世十只ハ古式ニ色々ノ説アレハ人倫ニハ

二句ツク去キナリ佛所 △若菜△郭公△松虫△水仙 世七只ハ會立息ノ各目ニテ決レテ

△水鷄△之月月△尾上 世二有ハカラストナリ會意心トハ

二字ニ字ノ意ヲ會テ其各ヲ作ル △雪△雨 世二只ハ古式ニ色々

ハ日用ノ物ナレハ一座ニ △虫魚馬車△飯餅茶酒 世八只ハ各目

二句ツクハ有キナリ △松ノ子△日△月△更科△花 世九只ハ連テ一ノ所ニ

シテ俳諧ノ家ニ論ナレ △鐘△鉄持扇△瓜木△妻女 世十只ハ連テ一ノ所ニ

△歎△木△篠△依△々△四維△おみ△塵の首△水追 世七只ハ古式ハ嫌物トナ

△山伏△山藪夜分 今式ニハ世沙伍ナレ △扇△伽 世八只ハ古式ニ

△送△火△轉露△眠字△起字△虫石 世九只ハ古式ニ

一夜分ト定レ在今式ニハ夜分ノ意ニテ指合ヲ釋ナラス △冠△鳥帽子△綿△木棉 世五只ハ古式ニ附向ヲ

△夕△立△雲△雨△笠△唐弓△狩 世五只ハ古式ニ附向ヲ嫌ヘレ總テハ

古今ノ違ナリ △平生△師走 世二只ハ古式ニモ異々各ノ月ハ附レ

△山降△山嵐 世四只ハ凡例ナリ總テ天象地形ヨリ能藝ニ屬

復ニ至ルニテ字類ヲ以テ例トス一理万通ノ故ナリ

指合可有ニキル人分別事

○迎○而 世二只ハ半合波ノ所ナリ本又ニ合別スレ ○社○多○り○比○多○あり

古今類聚



○不<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>○<sub>レ</sub>て多<sub>レ</sub>り世四只ハ古式ニ六丈又ト  
Pレ氏今式ニ子細ナシ○之字假名

○五字假名世二只ハ古式ノ名同ナリ  
今式ニ六等ノ細ナシ○老○親子世二只  
ヲ古式

ニ速懐ト成セリ今式○鳴子○網○花鳥繪○花<sub>レ</sub>櫻世五品ハ古式ト今式トニ去嫌ノ遠目  
ヲ云ヘリ其下ニ考ヘ知ヘキナリ

○楓<sub>レ</sub>紅葉世五品ハ古式ト今式トニ去嫌ノ遠目  
ヲ云ヘリ其下ニ考ヘ知ヘキナリ

### 千句<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>一物<sub>ク</sub>事

●鬼●虎●龍●女世四只ハ連能ノ差別ナリ新式ノ  
一座一旬ト云フ所ニ凡五十余名

アレ氏多ハ連能ノ用ニシテ能譜ニハ不用ナリ去レ氏世四只ハ  
佛拿ニ敵レテ能ト誰トノ差別ヲ云ヘリ今式ニ異射ノ数ヲ定ス

### 花鳥<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>二物<sub>ク</sub>事

柳櫻厚<sub>ニ</sub>燕<sub>ニ</sub>掌<sub>ニ</sub>八<sub>ニ</sub>兼<sub>ニ</sub>千<sub>ニ</sub>鳥世七只ハ古式ヨリ一座  
一旬ノ物ナレ氏花鳥ノ二只

ハ四花ハ月ノ貴<sub>ニ</sub>取<sub>ニ</sub>效<sub>ニ</sub>ヒテ一座三句ワ有キトナリ花鳥ノ名ハ代々ニ考ヘシ冬牡丹冬椿冬梅

紅梅<sub>ニ</sub>緋桃<sub>ニ</sub>梅櫻<sub>ニ</sub>紅葉<sub>ニ</sub>山吹<sub>ニ</sub>郭公世八只ハ花鳥ノ  
中ニモ只一旬ニテ

二句ハ有<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>キ物ノ凡例ナリ世段ノ詮用ハ二句有<sub>レ</sub>手異射ハ  
只三<sub>レ</sub>二句有<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>キ同射ニト成セル二句一意ノ用ヲ知キナリ

### 日用<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>輕<sub>ニ</sub>物<sub>ク</sub>事

○昔曉○<sub>レ</sub>度垣○袖襟○湯汁○文仗世十只ハ天象  
地形ヨリ取賦

食服等ノ凡例ナリ世類ハ  
總テ射用ノ輕重ヲ知ヘシ○<sub>レ</sub>後笑○<sub>レ</sub>照屋雲○<sub>レ</sub>植<sub>レ</sub>竹

○<sub>レ</sub>眠<sub>レ</sub>覺○<sub>レ</sub>起居世十品ハ能<sub>レ</sub>子ノ凡例ニシテ  
面ヲ替テハ七モ八モ有ヘシ○<sub>レ</sub>月白異

○<sub>レ</sub>耳口○<sub>レ</sub>手<sub>レ</sub>足世六品ハ支射ノ射ナレト平話ノ  
用多ケレハ折ヲ替テ四年モ有ヘシ

古今抄卷四



不可不審控之事

老福神親子 世之品ハ不審ノ理屈ナリ 稿妻 今亦ラ取レトナリ

電光引鳥雀橋 龍民空電 世五品モ前ノ例ナリ 古式ハ嫌又物ヲ今亦ニ嫌ヘル

控ノ不審トハ青柳 艾虫 櫻人 世之品ハ亦同ノ相違ヲ 世四品モ相違ナリ

洞露洞雨青机櫻鳥 用所ハ其下ニ考シ 都鳥 世ニ以テ連佛ノ用無用ト亦損益ト知テナリ

百不及論物之事

雷ノ雨散 椿ノ花 蓮ノ実 世之品ハ佛舎ヲ難シ今亦ニハ不用ヲ云ヘリ

朽木 釈文 今流類説 白晁紙 取成 世之品ハ古凡ノ附以意附ト

云ノ取成ト云ル其比ノ設ナリ今ノ能諧ノ不用ナカク世等ニ古式ト今式トノ各別ヲ知レトナリ

文字穿鑿之事

影陰 也成 塲庭 世之品ハ古今ノ常談ナリ然レモ今亦ニハ庭ヲニハト訓レ塲ヲハト

訓レテ例ノ一字 傳 滝 詠 齡 世四品ハ十條ノ意地ナリ詮用ハ其文ノ

下見ルレシ 下見ルレシ 下見ルレシ 下見ルレシ 下見ルレシ

家之秘傳之事

書之九秋之九外方暮 世之品ハ佛舎ノ文法ニ傳授ノ自誤ヲ難セシナリ



此等ニ連他ノ用上ハ  
 無用トヲ知レシ 鴉鳥 都鳥 朝角 如四子毛例ノ  
 傳筆ニハ新式ヲ嘗言タリ 毀タリ 畢竟ハ自己ノ傳授ヲ曠  
 ル古凡ノ抄者ノ筆法ナリ 此故ニ今ノ他諸ハ人ヲ毀ルニキ  
 置カレ例ノ虚実 ○稿 負鳥 ○百千鳥 ○啞子鳥  
 ヲ察ホス一キナリ 他借ノ亦同ニハ不用ナレト  
 此レ鳥ハ歌道ノ傳授度ニテ 他借ノ亦同ニハ不用ナレト  
 此レ鳥ハ歌道ノ傳授度ニテ 他借ノ亦同ニハ不用ナレト  
 知識ヲ飾ントスル自讃ノ姑凡ヲ笑ルナリ 然レハ後メ自己ノ  
 ハ文字言語ノ用ニ非ス混尚ニ中古ノ誹諧ニ敵レテ  
 此十條ノ意地ヲ立ルニ言ハカ當ノ秘訓ト云イ 一刀  
 兩断ノ法語ト云ル文ノ虚実ヲ看破スレ

古今抄序目終

拾遺十箇條 月之口

一理万通序

東花坊

今ノ拾遺十箇條々負字の末比よりえ縁  
 の又天酉ナクに湖南ノ字々ふられ武江ノ縁ハ  
 了故翁の夜話と紳とちりてかく十條の  
 極目と心とに故翁とて世よりかりとねと  
 獅子庵の遺稿よりとて五秘の二帖とて  
 きり也とてとてとてとてとてとてとてとて  
 負性の傳筆もとてとてとてとてとてとてとて

古今抄卷

六



ちれハ中右の誹諧ともしく時を連音の式目と  
 以てし何れハ失火ハ池魚の殃ツナガハとおそろく一を証と  
 志せしるの魚ハ腐らひくもくし人の心持  
 ありて滅ねの撰集よりこれとかくて  
 遺稿のつくり果てしあるは彼ハ十論ハ  
 衆評とすあらせけり十條ハ衆評とんんせ  
 了物ハ二十年の歳とすくハ皮下の瘰癧ハ  
 耳とせしをききとて世之人ハちほくして例ハ  
 達行の之地と志くハ洋におそろくまは  
 寶永 辛卯之月日 け事也

拾遺十箇條

○古法可有取捨事

中右ハ誹諧の法式ハ連音ハ一ある物ハ誹諧ハ  
 一とありとあり也といふハ一六あり也といハ  
 ちとありとせりとあり也といふハ一ハ折と嫌ハ  
 面ハゆりて其こと連音の差ふとあせれと  
 せしめとせしめとありとありハ一と一とありと  
 する理とせしめとありとありハ一ハ一とありと  
 志嫌とせしめと天象地形より草木を證し

古今抄巻五

七







ちりと申右の遊末よりの一丈と掃ふにこの御座  
 して神代に代なと字のころあかしくと遊末の  
 ちりひより千式といひはといひ用ふれあはれ  
 捨る不もふあんおしや古代の取捨といふと  
 四式といふ▲柳只▲櫻只一してま柳といひ遊櫻と  
 いひ或は秋冬の詞とむとひてとある一とを  
 られと遊遊まの柳掃といひ掃鯛といひ替り例  
 の中より一とれとまといひま柳と遊掃と二名  
 一辨の物あれい今此遊遊まの只一といふま柳等  
 いひ柳園といふは辨と例のあをいふま柳等

る歎も食服も皆くこの例まま也▲草只一  
 ▲草只一四式をかくのこく二遊ると言われ一と  
 遊遊と例の青訓も及ぶと言くと二ある一  
 とは何れも言はれるあるやあ言ふ一とあるあり  
 とその中ちらげれの数多あれ一色くといひ掃  
 一とあり一遊下通の時あうんまを言の初あを  
 ちりひよりなると言ふとあ一かこれといふも  
 とこまに言くと二あるといふまうといひ掃  
 とこ秋とあといふと言くと二ある一今をけ  
 六果と凡例として古今のたふとまといひあはる也







へきしむる由ありんかといふにんるるやうに  
 けりる初とるるありし人倫ありしとていふに  
 けりる人倫とていふとていふに起る見守の詞  
 とはげし人のいふをたもむき苦あれたる父母とい  
 △男女といひ目をくら耳きくらら又字のわが或を  
 自他のいふにころら或は染付のまらうと考へ  
 打越の所といふありし人倫の事をいふに  
 一かゝのころらとていふに古おはしむる  
 △こゝ△誰△身△独△媒といふれをきし人倫の事  
 して人倫とていふにこれといふに削の實を極と

おおとていふにや古式の覚えかといふに△誰何とい  
 打越し人倫と婦といふに例のいふに子とていふに△僧の  
 人倫といふにとていふに例のいふに居るといふに色くといふ  
 法をいふに式といふに例のいふに分るにといふに△僧の打越  
 といふに人倫といふに△寺の打越といふに婦といふに  
 △親王△皇女のいふに△天皇重といふに△王女とい  
 といふに何の部といふにといふに△帝といふに人倫といふ  
 去て△佛のいふに△仙といふに△佛といふに△鬼とい  
 △新院のいふに人倫といふに△佛といふに△鬼とい  
 といふに式といふに部といふにといふに△佛といふに△鬼とい



打越らにきしひ人倫あしひし人倫のたむは  
 しましあしひて古今せきしひとよまを古あめりし  
 △あまのま△節△松△虫△水△虫のおを音訓かたり  
 異なるよひて一たよ二とあされとも今の能階の  
 級よ一の子の會ととり各とあまら物を決て  
 只二とまのませ況や法華の△水鷄の式△陣△号  
 一と一と一あれと能階よ上下とちうつ一と二ある一  
 とつりまらるる語法の指令とつりあしひせ上下の  
 らある一とれとれととらひきしひとあらひとあしひて  
 △二日月と二とあされとあしひとあしひとあしひとあしひ

決て只一ある一△尾△とつりよと二とありて連よは  
 詞よ多用あつちと能階よ一と一とあしひとあしひと  
 豊節の艶詞よ用一とあされ一と子の名同よ△平△  
 田ありて△雨と二とあれとあまはあまらて用おは  
 あまはあまららりてとととととととととととととと  
 △虫△魚△馬△車のととと△飯△餅△茶△酒のれ  
 らととととととととととととととととととととととと  
 のととととととととととととととととととととととと  
 △や月△△前△餅のとととととととととととととととととと  
 教皇ととととととととととととととととととととととと

古今抄卷四

十一



教とほくちわいまといふの名とあけし一象乾  
 百物とまじりて一言とあり万語とほいといふ余らけ  
 例におきて可きものや古式の婦よおの△松よふの△  
 大論より△月よ交秤と附るとまじりて△昔方神也  
 と附るとまじりてはれは論を今の用よとあり  
 △鏡よとまじりて詞と全く連音此用として我々  
 いけ詞よありされと詠諧の歌文よ△女の歌<sup>カ子</sup>ありと  
 まじり△大工の規矩と婦よこれよ何なりと論よ  
 及びと或ら△匠木よ妻とまじり△歌よ木<sup>ナキ</sup>の何なり  
 連音此用ありと△正いよ向いよ詠諧の<sup>子カ子</sup>程不見

あん或ら△篠よ依之器と婦よ何なりと何なり  
 一これと△おはな<sup>ス</sup>の書よ水也とまじり何なりや  
 と折号とまじりて況や△山依よ五<sup>ノ</sup>と婦よ  
 一とまじりて字とまじりて百人とありとまじり  
 一と一或ら△詞也とお分とまじり△送とあり  
 とあり△火とお分とあり△物<sup>ノ</sup>の勿論とまじり  
 △起りも△海とまじりとお分と婦よこれとまじり  
 姿と論とまじりて何なりとありとまじり△虫△作  
 のおと大むりとお分とまじりて一実よお分の  
 決り佳あれは打越のまじりてとまじりて一お分

古今抄

三



の指合とて言ひしとけ例と刺交の増梅とて  
 角一してや右式の嫌にぬれと△冠とて言ひしと  
 法け△綿と本棉と法け△文とて言ひしと嫌にぬ  
 り△ぬとて言ひしと△論とて言ひしと論とれり  
 一とて言ひしとけぬとて言ひしと附とて嫌にぬれ  
 今の能潜とて言ひしと今用の法はあれとて言ひしと  
 けぬとて言ひしと今用の凡例とて言ひしとて言ひしと  
 皆く尋るに及びしと法はとて言ひしと法はと  
 △法とて言ひし△所走とて言ひしと名の名と  
 附一とて言ひしと嫌とて言ひしと法とて言ひしと

但と法とて言ひしと今用の法はとて言ひしと  
 右今の新敵とて言ひしと連字とて言ひしとあるとて言ひしと  
 一とて言ひしと連字とて言ひしと一とて言ひしと  
 と二とて言ひしと今用の法はとて言ひしと  
 の人知とて言ひしと折ぬとて言ひしと馬の折ぬとて言ひしと  
 牛ありとて言ひしと今用の法はとて言ひしと  
 連能の用とて言ひしと今用の法はとて言ひしと  
 とて言ひしと今用の法はとて言ひしと  
 とて言ひしと今用の法はとて言ひしと  
 とて言ひしと今用の法はとて言ひしと







又「子」と「方」一「は」の「は」とは「は」として  
「二」の「家」は「は」として「二」の「家」は「は」として  
「く」の「世」の「世」として「く」の「世」の「世」として  
去嫌と今の能指と論より時をよしのはたの能  
時ありて言に部よる界とと「ゆ」の「ゆ」として「ゆ」の「ゆ」  
と「か」の「か」として「か」の「か」として「か」の「か」として  
「一」能指とよ「一」の「一」として「一」の「一」として  
○ 指合可有分別事  
御筆より「一」能指と「一」言おと能と「一」能指と「一」能指と

さよこま

可言おと「一」能指と「一」言おと能と「一」能指と「一」能指と  
「一」能指と「一」言おと能と「一」能指と「一」能指と  
これと「一」能指と「一」言おと能と「一」能指と「一」能指と  
「一」能指と「一」言おと能と「一」能指と「一」能指と  
指合より「一」能指と「一」言おと能と「一」能指と「一」能指と  
「一」能指と「一」言おと能と「一」能指と「一」能指と  
花と「一」能指と「一」言おと能と「一」能指と「一」能指と  
「一」能指と「一」言おと能と「一」能指と「一」能指と  
「一」能指と「一」言おと能と「一」能指と「一」能指と  
「一」能指と「一」言おと能と「一」能指と「一」能指と

古今抄巻

某



了大和の詞とる者テハのとき訓畧を抄へしきと  
 歌人と連音解し假名と真名とに通せられた  
 不業のころのおほくは詞を抄へしきと  
 ちりゆりゆりの歌のゆりまき用あれは  
 つかひのころ指合のされし軽きれは  
 の字近ははるせておらさし  
 所合の作者の字書よあつねの  
 多用して寛制の自在とふ  
 らたのころしてふらふも上下の  
 とさしつれは所あるやと分る

ころおとくし連来より折し  
 婦よとあれとねくと耳よ  
 の一途と折とるころ上下  
 ころおとくし連来より折し  
 婦よとあれとねくと耳よ  
 の一途と折とるころ上下  
 ころおとくし連来より折し  
 婦よとあれとねくと耳よ  
 の一途と折とるころ上下



中し古式の覺かへまゝの○と字假名より五字假名  
 のおのむまゝしりてあらふし一能階はねのお語  
 あるに二なくし指とおるしやなれしの名目と  
 論し及びすとまゝるよ○老と迷懐とと人間の私  
 て今や詠笑の和ようし老を免てさきく部よ  
 入て敬<sup>ヒ</sup>尊<sup>ヲ</sup>美<sup>良</sup>老<sup>ト</sup>とつる事<sup>ヲ</sup>孫の詞しきと入  
 さしはりて○親子と迷懐ととささしくとた  
 とこまひやととこれしハサカサふとやらむ  
 物し古抄の題<sup>ニ</sup>辭よる辨より一とつる  
 お母一まゝの白くつとつとつとつ親とまゝとつと

子と推んし孝悌と辨より一やきとつと  
 つとくとし筆よるまじきはなまゝとつと  
 或ら○親子と稽とやらぬと拈よるま  
 いらぬとつとつとつとつとつとつとつと  
 一とつとつとつとつとつとつとつとつと  
 例や或ら○草木を歎の繪よまゝとつと  
 あらふとつと拈よるまじきとつとつと  
 なる論あらんまゝと拈よるまじきとつと  
 ねる○孫の月○翁の花の例やまゝとつと  
 万代の一ツ十知しりまゝとつとつとつと

古今和歌集

十一











いづれの能潜る鄙詞とありあむ誹諧のたて集  
 の伴ふよりとてあやしきや公任孫信の  
 和漢通達の寄信達も能潜の辨れありあむ  
 いづれこのさかきくやとあやしきもの  
 我十條の通とくもおそろしきか建門  
 のさかきゆのれは和歌とつらひ連言とありあむ  
 能潜とありあむはあやしきは不<sup>ス</sup>孤<sup>ラ</sup>起<sup>ス</sup>り  
 大道の治文よりまたの故きときめれを武の  
 新きときんてあやしきは是よりいづれを  
 非といふもあやしきあはれぬ人を彼より我

とあやしきもの我ら彼ともくは我ありあ  
 復し春秋の釘詰とおのの我とあむあめつけ  
 十條より我と罪とあむあめつけ十條ありん  
 初よりあむと非の能よていづれあむのま前  
 け言とあむいして一きり再選の功とあむい  
 一世の議とあむと今れ十條より一かめ海と  
 一きりいけ一能あり

○花鳥有<sup>ニ</sup>物<sup>ク</sup>事<sup>一</sup>

旧式と竹本も然のれはおもむね只一より音訓



しかりと異なるよみてを二つありてあれど  
今の能指の次は「論」と音「し訓」とかり  
まして「と名」と「中」にありて「二ま」  
花も「ある」一「ま」の「柳」の「ま」を  
柳の「ま」を「ま」と「結」と「ま」の「ま」を  
まの「ま」を「ま」と「ま」を「ま」と  
まの「ま」を「ま」と「ま」を「ま」と  
まの「ま」を「ま」と「ま」を「ま」と  
まの「ま」を「ま」と「ま」を「ま」と  
まの「ま」を「ま」と「ま」を「ま」と

まの「ま」を「ま」と「ま」を「ま」と  
まの「ま」を「ま」と「ま」を「ま」と  
まの「ま」を「ま」と「ま」を「ま」と  
まの「ま」を「ま」と「ま」を「ま」と  
まの「ま」を「ま」と「ま」を「ま」と  
まの「ま」を「ま」と「ま」を「ま」と  
まの「ま」を「ま」と「ま」を「ま」と  
まの「ま」を「ま」と「ま」を「ま」と  
まの「ま」を「ま」と「ま」を「ま」と  
まの「ま」を「ま」と「ま」を「ま」と



と二花より二あり一と云ふ古今此花とあるは  
と云ふも決して二あり一と云ふも余の竹木も  
は例と云ふ可ま也中らけ式の流るる不柳を  
はよねともちるはと云ふ一様とおし流るれと  
かす時と云ふもぬれや草の盛衰より厚も  
薄もゆるせと云ふも四季のうつりけ親おふ  
凡花を例のさひこより悲表哀乐の表とされ  
と云ふも一はも各と云ふも一は一花二用れる花  
あれ二花より二と云ふ一は二の二の例と

ある一は二の二の例と云ふも一は二の二の例と  
と云ふれを決して論の筋れを云ふに云ふ  
二用の例と云ふも一は二の二の例と云ふも  
と云ふ花と云ふも一は二の二の例と云ふも  
四季の各目をかきんかきむはけ式の如し  
つと云ふ例と凡花の貴賤より花名の二は云ふ  
月雪花数号と一は二の二の例と云ふも  
例と云ふ一は二の二の例と云ふも  
つと云ふも一は二の二の例と云ふも  
用と云ふも二は二の二の例と云ふも







おろそ態藝の字ありし屋押遣用の軽とい詞  
 かしらひ右式一しうあし折と替てて同し  
 さましくいふかの詞字の向とあてはとさましく  
 せうといふあつといふの字はまを論い及  
 まして折といふ表とあつといふのよるよる  
 さましく今選さるたけ後をいして論らるる及  
 わし中身あつゆる詞字の軽言とと我とま  
 一これいふまを折とあてていふまを軽とを面  
 とさうしていとさあふ千文万子の感あつた  
 の字類と凡例とあててあつて一固といふ

も付しむれこれまをとあつと也

○ 不可不富<sup>キ</sup>控<sup>ス</sup>之事

おろそ中右の式目と論らるる、中一は連詠の  
 用する用とてことまへかんと連詠の艶詞の  
 あつとさういふ中一とさういふ房とさうい  
 滑移り詠笑の和とまへかんと今この能活の  
 詠とてさういふあるるやおれり中より  
 不富とてまへはたををを述懐とて表八百  
 と嫌へしおの種を嫌ふことやあつと彼子



何處ありてかこし命字とものく述懐とあり親子  
 してきくを述懐あるよりこれくを所ある  
 殆どぬく或は福妻電光と天象と嫌うこと  
 つひ鳥鵲の橋とせしめよあつことと我とせしめ  
 よ嫌うことと民の電とて示すよあつことと  
 例の不用くやむ所もやけおとを命と推量  
 してくを船とて示すこととあることとあつね  
 不書の中より用くや他ら今式めらんね  
 一とやせられく中より借馬糸の所を秋能滑の  
 用ありねと論き不書とてなくことと

つしるくは御況よと書く一は柱也よあつね  
 其況よと秋よあつねと書く一は柱也よあつね  
 櫻人況よと書く一は柱也よあつね  
 人倫よと書く一は柱也よあつね  
 ちんある時をきくこととあつねと書く一は柱也よあつね  
 一貫の日ありん或は洞の書と書く一は柱也よあつね  
 洞の雨と書く一は柱也よあつねと書く一は柱也よあつね  
 不書ありしけおのちや調とて我家  
 の用ありしけおのちや調とて我家  
 一と書くと書く一は柱也よあつね



あんまの字とまをて秋北の字とあつて根が  
 下を木の根と云ふとやとらるとは木の根の下と云れ  
 りて木の根を云ふと云ひてまの根とおかしくする  
 まあまの字のちりひありてこれと不審の  
 不審  
 不審  
 とやひつむ但をまおと看破して不埒不的の認  
 とやひつむ或と標とと雜とこれと標とを  
 分論とてまの字とまの字とまの字とまの字と  
 名あんと論あふ秋の字とまの字と或は字  
 記の字と論を言おふ冬とまの字と記と記と  
 同よつて集候と云ふねりてその字とまの字と

一難破して記の字とまの字と連来りての字と  
 まの字と記の字と折と媽とや何れよけ一字の  
 連来りての字と記の字と折と媽とや何れよけ一字の  
 平話とこれの字と記の字と折と媽とや何れよけ一字の  
 此論と記の字と折と媽とや何れよけ一字の  
 不審の字と記の字と折と媽とや何れよけ一字の  
 但を老人と連来りてあつて記の字と折と媽とや何れよけ一字の  
 古抄の字と記の字と折と媽とや何れよけ一字の  
 家議と記の字と折と媽とや何れよけ一字の  
 子と記の字と折と媽とや何れよけ一字の







し八百の威儀し道すと二貫たわよとさむは  
信士の道生は仰ふあるおとあつたおの  
論より世向の人よあさむうれて果を奥山よ  
ひさかたの石とあつたり聴えとあ何うと  
仰ねよ二京あつた悉皆成仰の二説あると  
中二可とのはと説の人の頑石となく証証と  
り世を極とあさむうとあはととりとさむは  
さといふ二万あるしわとさき二一帯下通あると  
あれりげぬよ我よ十條をたぬの千言り證と  
あつてはよ二ねのなとされとせ海や空にた

書と信をとと今と書あさよとつとつと  
けよ十條の系権人うして能清と今日の和  
よあさひて平詔とあつよふあれた連能の  
何はよかつとさむとわの安々議よ  
つとつと

○曾<sup>テ</sup>不及<sup>ル</sup>論<sup>ニ</sup>物<sup>ニ</sup>く事

はらうく能清の始とおのつたの時と連まうた  
酒自とちと信の能清所りつとつと真名  
とまうれ一鄙後お言の勢口とまわて天地  
己用の虚実とつげつと信誓のちとつと



之を以て稱のね子のしひに於てそれと能階と  
 各片けなうしげとを連言のふ式になうしと  
 ありまの人の東詞はとて一馬と氣をとて  
 うとて今この能階の言行よかす用のほ片の  
 お月さんおれの中よりと例といふは▲吾も氣の  
 附句と嬌うととておれとあげ万葉といふ  
 れこれと今と附くも附ねとこれの論  
 ても及ぬ也或と▲標と新ありをむとむ  
 てもさきありきとひ花のうはとて花の  
 あり白辨ありとまきあるととて何なる

け標のこかく念の入るや或と▲蓮の突いさ  
 蓮と花とともよと突と指おせよと蓮肉  
 あつてて業務はとふる所ありといふ也は河  
 指物よりともなる河も新也とてはる傍  
 の海歌よ念の入るや藤人とはとふとて  
 能階よんりりて言あるはとてはも標もを  
 と張るぬと新ありとて花と共よと突と指よ  
 い千州も万本もとてや或と▲標本の歌文よ  
 松と心とと例のうと▲は流の類説、新なる  
 のをよ附と今此能階よとてはる或い▲皇統







むし訓と一しきしひき文の識伴達と叱  
 まうりもむりや動トウとささしこち美ありと  
 我おの馬もてかへしあやまらふ教ふなせ  
 物して今ものらさくあらた和の平話と凡雅と  
 正語と及ふとんけなよけ後と墨海と城と  
 陣とくらうて馬と後ひとささきとととせ  
 と古抄と新し古老と敵と平竟と今世語  
 と耳学文の害らんととれとせはらふは金世  
 鳴の下よ。鳴をひいたらせむの海と字よ

ふせかへしとら一ととていりておちの海と  
 ふまをあらんととていりてとらとせはらふ  
 つかう。海の海と大海ととらとていりてとらと  
 のあらふ池水のとていりて海水のとらとていりて  
 ありととていりてとらとていりてとらとていりて  
 名蹟とていりて或と。海字の歯牙撃と海の子  
 り字の誤あり曝布の子ととらととらと例の  
 子彌とあり但や曝ハク字と老人の誤と曝を  
 飛泉懸水とあり彼と子と曝ハク布と訓と  
 詩ととらと人の形容ととらと海のとらととらと美訓



















又らものうまよるま一と云ふ今迄はけの用を  
 新式の年のまよと持ては筆のうまよと用ひ  
 ありされし新式の年のまよと持て今迄の  
 とせむしるは筆のうまよと持て今迄の  
 てよまの指令も中念ありとせむし能清と  
 八類ツラモウ類といひて中用の後語よりせむしけ  
 以下を丸くしと例は古の年下自慢也今選  
 せむし難答の事竟をこそせむしと二十世紀訓  
 異なりして禪所セシジといひは師とて小格ハコシなりと云ふ  
 せむしあれし障子セウジといひ菓よといひ和訓を

これの俗ありてまよと大和の非秘といひ  
 せむしなるおら師のやありしと漢子の自慢と  
 後語とせむしといひせむしけ論の行まるは  
 法筆のしる十ツジ年といふも新式めしる十ツジ年  
 あれし十ツジ年ヨウシといふ年といふ年の子と婦メカあり  
 あり物のあせし十八ヤウ年ヤウといふ年の子と婦メカあり  
 と新式の年ツジとせむしといひ一かめといひく  
 といひを例におらめ授記ありしと記ありし  
 けふとあせむしけふと能清と実とといひせむし  
 能清と虚とといひせむしと又子の能清と実と  
 能清と虚とといひせむしと又子の能清と実と







と誦さし—去とる物の果とひらたきとらまらむ  
 とつひあまこらあまかといふけなけ詞とて  
 夕都はゆつりつりてあまの月とてかれ果あま  
 いと言されしあまの言とて能代<sup>の</sup>  
 とまら—或とてあまの言とて能代<sup>の</sup>  
 傳の秘す—おそく昔代は傳とて人ある  
 こと—自<sup>証</sup>をとりとておとす所傳の  
 うあ—うらやけにふとらりて大秘す  
 百世の人とておとすや秘—つらぬはら  
 あり—我のこころつて人のこころとて人のみ

秘り—式目の用とてあまのあつたの能代  
 の曲とてけ詞とてあまのあつたの能代  
 埒のあけつむつ—むかひの葉假名のあまの  
 用とてあまのあつたの能代とて能代  
 傳とて北下とてあまのあつたの能代  
 ありの秘す—あまのあつたの能代  
 とて—つらつとてあまのあつたの能代  
 ころつとてあまのあつたの能代  
 我方の秘す—あまのあつたの能代  
 とて—あまのあつたの能代























